礼拝　　2020年7月１９（日）
題　「憐みの器」
テキスト：ローマの信徒への手紙９：１９～２９
（聖書の個所は最後にあります。）

今日の聖書の個所は先週の続きです。共に学びましょう。
聖書個所の小見出しに、「神の怒りと憐れみ」とあります。実はわたしは長年この個所はあまり好きな個所ではなかったのです。聖書の個所を好き嫌いで読むのもどうかと思いつつ、実は分からなかったのです。つまずいていたのです。理由は、「神の怒り」という言葉が、今は亡き怖かった父のイメージと重なっていたのです。長く「父なる神よ」と心から祈れなかったのです。
ちなみに宗教改革者のルターも父親が厳しく怖かったようでした。自分の父と神さまのイメージが重なり、神を信じていても、愛なる神ということが長く分からなかったようです。しかし、ルターはイエスの十字架で神の罪に対する厳しさと同時に神の愛を受け入れ信じることができたのです。

聖書のことばのすぐには理解できない個所にこそ、人間の心と魂に触れ癒してくれる宝が隠されていることがあることを思うのです。
忍耐して聖書のことばを食べるように味わい心に宿すことが、生涯にわたるキリスト者の心と魂の営養、エネルギーになるのだと思うのです。
パウロは言います。
19:ところで、あなたは言うでしょう。「ではなぜ、神はなおも人を責
められるのだろうか。だれが神の御心に逆らうことができようか」と。
この個所の理解は難しいように思えるのですが、人間が、神の力に降参しているようではあるけれども、神への不遜な開き直りがあるとパウロは見ていると言われます。聖書には、神と人間との基本的関係が語られているのです。パウロは「20:人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、「どうしてわたしをこのように造ったのか」と言えるでしょうか。」と言います。多かれ少なかれ物心ついた人間は、神を知らなくても、自分や家族を含め他人や人生に不満を持っていることがあるのではないでしょうか。
「神も仏もあるものか」と思うこともあるでしょう。そこまでではなくても、信仰者でも「どうして神さまは～」とか「どうぜ～」とか思い、悩みの中で心を閉じてしまいやすいのです。それに対してパウロは「あなたは何者か。」と問いかけるのです。
この問いは、すべての人に当てはまると思います。「わたしは何者か」神様の

前で自らを振り返るのです。神を知らない時は、人を見て、人と比べて、自分を知っていたのです。しかし、それではいつまでたっても本当には自分を知ることはできないのです。神を知ってこそ、自分が見えてくるのです。ですから「自分は何者か。」とは大切な問いなのです。信仰を持って人生を生きるとは、神を知って行くこと、そして自分を知っていくことなのです。

「 21:焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのではないか。」とあります。
「焼き物師」とは、旧約聖書にもよく出てくる神さまのたとえです。（イザヤ書６４章７節（P1166)、エレミヤ書１８章１節以下（P1210)）人間は神様の作品だとも言われます。
神さまの自由な作品です。一人ひとり異なっています。それで良いのです。
神さまは器を造る権限を持っておられ、人を自由に選ばれる方です。それゆえ、人間にとって一番大切なことは「自由」なのです。それは人間の尊厳さを表しています。人間の自由を奪うことは誰であれしてはいけないのです。家族であれ、国家であれ社会であれ、組織であれ、この人間の自由を束縛してはいけないのです。ですから独裁国家とか、全体主義的な国家は良くないのです。しかし、この神さまから与えられている自由は、好き勝手にふるまうということではありません。神と人に対する責任はわたしたち人間にあるのです。特にキリスト者は、この自由を愛を持って用いていく務めがあるのです。ドイツの首相であるメルケル首相の著作に「わたしの信仰」という本があります。彼女は東ドイツ生まれの牧師の娘です。その彼女から教えられたのですが、現在のドイツの憲法にあたる基本法の最初には「神と人に対する責任をもって」と記されているとのことです。そして彼女は「神はあやつり人形を望まれませんでした。」と、神が人間に自由と責任を与えられたこと語ります。聖書によればその通りです。すばらしいことだと感銘を受けました。
　さて、被造物は神によって、人間も神によって愛を持って造られました。
そのように聖書からわたしたちは聞き信じているのです。
　「21:焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのではないか。」とあります。
「粘土」とは、創世記の最初に出て来る、人の創造物語、少し神話的な表現だと言われますが、意味が大切だと思います。人間を土から造られた物語です。ここからは神さまの深い愛情と、人間の弱さや壊れやすさを学べます。「一つを貴いことに用いる器に、」とありますが、いろんな日本語訳聖書がありますが、これについては「貴重な物を入れる器」とか「美しい花瓶」とか訳されていま

す。「一つを貴くないことに用いる器に」とは、「値のはらない物を入れる器」「ごみを捨てる容器」とか訳されています。

問題は、良いとか悪いとかではなく、それぞれ用途が異なっているということ、そして最後は欠けたり壊れたりするのです。どれもこれも神様から見れば大切なのです。それでもわたしを含め多くの人間は、「貴重な物を入れる器が良いな～。」と思っているのではないでしょうか。どうしても価値観にかたくななのです。美しさも時代によって民族によって異なっています。

旧約聖書によれば、神は愛を持って作った人間が、神を忘れ自己中心に行き出し、悪いことばかり行い出し、人間を造ったことを悔い、ノアの時代に大洪水で裁かれたのです。しかし、全滅ではなく、神の選ばれた残された者たちもいたのです。

「22:神はその怒りを示し、その力を知らせようとしておられたが、怒りの器として滅びることになっていた者たちを寛大な心で耐え忍ばれたとすれば、

23:それも、憐れみの器として栄光を与えようと準備しておられた者たちに、御自分の豊かな栄光をお示しになるためであったとすれば、どうでしょう。」　神は、人類を滅びではなく、寛大な心で耐え忍ばれ罪から救うために独り子であるイエスを救い主・キリストとしてこの世に送ってくださったのです。これが神様の憐みであり、福音・喜びの訪れなのです。

パウロの語る「憐みの器」とは、先に招かれたユダヤ人、そして後から招かれた異邦人からなっているキリストの群れ（教会）のことなのです。

神さまは、自分の民として最初ユダヤ人を選ばれましたが、時至って、イエスを救い主と信じる、異邦人と呼ばれた外国人を選ばれたのです。わたしたちもそこに入るのです。神の憐みは、イエス・キリストにあって世界中、すべての人に及んでいるのです。

ここに招かれ集った私たちも、今は神様の憐みの器として、選ばれ、一人ひとり神様から備えられている豊かな栄光(苦しみを共有する中に表れる輝き)を示される働きのために用いられて行くのです。そのことを信じて生きて行きたいと願います。

◆神の怒りと憐れみ

19:ところで、あなたは言うでしょう。「ではなぜ、神はなおも人を責められるのだろうか。だれが神の御心に逆らうことができようか」と。

20:人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、「どうしてわたしをこのように造ったのか」と言えるでしょうか。

21:焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのではないか。

22:神はその怒りを示し、その力を知らせようとしておられたが、怒りの器として滅びることになっていた者たちを寛大な心で耐え忍ばれたとすれば、

23:それも、憐れみの器として栄光を与えようと準備しておられた者たちに、御自分の豊かな栄光をお示しになるためであったとすれば、どうでしょう。

24:神はわたしたちを憐れみの器として、ユダヤ人からだけでなく、異邦人の中からも召し出してくださいました。

25:ホセアの書にも、次のように述べられています。「わたしは、自分の民でない者をわたしの民と呼び、／愛されなかった者を愛された者と呼ぶ。

26:『あなたたちは、わたしの民ではない』／と言われたその場所で、／彼らは生ける神の子らと呼ばれる。」

27:また、イザヤはイスラエルについて、叫んでいます。「たとえイスラエルの子らの数が海辺の砂のようであっても、残りの者が救われる。

28:主は地上において完全に、しかも速やかに、言われたことを行われる。」

29:それはまた、イザヤがあらかじめこう告げていたとおりです。「万軍の主がわたしたちに子孫を残されなかったら、／わたしたちはソドムのようになり、／ゴモラのようにされたであろう。」